

■石黒忠恵 草創期軍医制度を確立しトップになるも脚気問題で辞任、茶人を抛所に、赤十字をはじめ人助けに尽し長寿を保った。

いしぐろただのり

- 阿部正弘首座 1845 = 陸奥国伊達郡梁川の奥州の陣屋で、幕府代官の手代平野順作良忠の長子に生まれる。幼名は庸太郎。父の転任で、甲府にいた時、すでに学問優秀の一方、痘瘡をわずらいあばた面になったりするが、
- 万次郎帰国・1852 = 7歳：父の任期満ちて江戸に帰り、浅草に住む。書を中沢雪城に学び、礼儀も教えられる。
- ペリー来航・1853 = 8歳：
- 開国開港・1854 = 9歳：父の供の途次、死前年の江川英龍を見、父が世話になった川路聖謨にまみえたことに強い印象、
- 安政大地震・1855 = 10歳：大地震に遭遇、病床の父を母と共に扶けるも、まもなく父が死去。遺訓に従い酒煙草は生涯しない。
- 松下村塾・1856 = 11歳：元服して忠恕を名乗り代官役所に勤める。暴風雨の際、商売になるかと屋根釘を買い、母に戒められる。
- 五ヶ国条約・1858 = 13歳：信州中之条に転任時、母いねが面疔を病み死去、天涯孤独となる。名を忠徳、さらに忠憲と改める。
- 安政の大獄・1859 = 14歳：江戸に戻る途次の宿で隣室になった勤王家大島誠夫に出会って感銘、上洛に従い、御陵拝拝も危険で、
- 桜田門外変・1860 = 15歳：一人中之条に戻ると、大島氏の訃報。懇請され、自由条件で、父の姉の嫁ぎ先石黒家の養子になり、
- 遣欧使節・1861 = 16歳：越後片貝村へ帰って久賀子結婚、捕吏が来て一人逃亡した際、適切に対応してくれた妻を一生の伴侶と決め、池津に移って家塾を開いて生徒を教え、村校の校事を助け、陣屋の命で事件の仲裁もする間、
- 8月18日政変 1863 = 18歳：叔父秋山の言で、信州松代に、幽囚を解かれた佐久間象山を訪ね、玄閑私いを受けるも、ついには面会を許されたばかりか、高く評価され3日も懇談、鏝への書まで頂き退所、関矢忠靖と越後巡察し親交、
- 禁門の変・1864 = 19歳：象山訃報に衝撃を受ける。家塾を本格化するべく、生計のため整骨医修業しようと再び上京するも固辞され、易占いにより、西洋医学を学ぶべく、江戸下谷の医家柳見仙に師事、松本良順の書などで必死に勉強した後、伊東玄朴の尽力でできたばかりの幕府医学所に入学、頭取の松本良順らのもて学び、
- 大政奉還・1867 = 22歳：下谷で商売をしていた大倉喜八郎と知り合い、同じ越後国人として、以後親交。
- 明治維新・1868 = 23歳：卒業して句読師となるも、維新となり、医学所は解散になって帰郷、息を潜めて北越戦争を避けた後、
- 戊辰戦争終・1869 = 24歳：出まわる慶業に対処できるように「慶業鑑法」を著し出版すべく上京、医学所のかつての同僚らに出会い、文部省下の医学所の後身大倉東校に出席、大学少助教兼少寮長になり、化学の講義案を、初の活字本「化学訓蒙」として出版するや大当たり、私家版で版を繰り返して、生計も安定してくるが、それが原因で、
- 廃藩置県・1871 = 26歳：文部省を罷免、洋行でもと考えていたところ、松本良順医学頭に勧誘され、兵部省に入り、軍医寮出仕。学問のすすめ1872 = 27歳：妻を呼びよせ下谷に住む。軍医の徽章に赤十字を用いようとしたほど、早くから赤十字に関心を持ち、
- 明治6年政変 1873 = 28歳：一等軍医正となり、牛込へ転居。看護婦こそ、傷病兵において母の役割と、その養成も考え始める。
- 佐賀の乱・1874 = 29歳：佐賀の乱には、小松宮に随行して従軍、陣中病院を監督し、
- 三つの反乱 1876 = 31歳：陸軍軍馬医監となって、米國に派遣視察、新聞種にもなったが、得るところ非常に多く、
- 西南戦争・1877 = 32歳：西南の役には、初の傷病兵の大量収容になった大阪臨時病院長を差配して知られるようになり、
- 大久保暗殺 1878 = 33歳：脚気の原因を徴のような細菌とした「脚気談」を刊行し、脚気病院設立委員から、
- 琉球処分・1879 = 34歳：愛知県立病院長になった後藤新平の才能を見出し、内務省衛生局へ採用を図り、医師をめざして東京女子師範学校を卒業した荻野吟子を私立医学校好寿院に紹介。文部省御用掛兼務で東京大学医学部総理心得に。
- ・ ・ ・ ・ ・ 1880 = 35歳：牛込に家を購い終生の住居。まだ無名だった中江兆民のたつての願いで診察、活動に差し支えないと伝え、その後の活躍につながる。陸軍軍医監となり、軍医本部次長として軍医制度の創設に尽力、
- 明治14年政変 1881 = 36歳：この年、最年少で東大医学部を卒業し、軍医に任官した森鷗外の上司にもなる。
- 新体詩抄・1882 = 37歳：長女孝子が誕生。西南の役時に設立された(博愛社)常議員になって、後の日本赤十字と実質的關係、
- 秩父事件・1884 = 39歳：長男忠篤が誕生。それまで女性に開かれていなかった医術開業試験を受験できるように内務省衛生局長であった長与専齋に紹介し、さらにみずか女医の必要性を長与に訴える等、荻野のために尽力し、この年、医術開業試験前期試験に、女性として唯一合格した荻野吟子は近代日本における最初の女性の医師になる。
- 帝国大学始・1886 = 41歳：陸軍省医務局次長、コレラ流行で各地に出張。日本政府がジュネーブ条約に調印し批准して、
- 国民之友始・1887 = 42歳：(博愛社)が日本赤十字社となり、ドイツのカールスルーエで開催された第四回赤十字国際会議に政府委員として出席後、ドイツ陸軍衛生制度を視察旅行、ウィーン万国衛生及びデモクラフィー会議にも出席、
- 初の対等条約 1888 = 43歳：有栖川妃を総裁に篤志看護婦人協会が組織され、看護婦養成が本格化するなか、帰国し、軍医学校長、
- 帝国憲法発布 1889 = 44歳：この年ドイツ留学から帰国した森鷗外は文学活動を始めるが、文学研究者には森鷗外の上官として、よく知られ、両者の確執が論じられることもある。陸軍衛生会議長を経て、
- 帝国議会始・1890 = 45歳：*陸軍軍医総監に昇進するとともに、陸軍軍医の人事権をにぎるトップの陸軍省医務局長に就任。
- 郡司千島探検 1893 = 48歳：後藤新平が相馬事件で衛生局長を非職となり、失脚しても見捨てず、その後ろ盾になる。早くも辞意を表明するも、大山巖陸軍大臣から直接慰留され撤回、以後、より責任を感じて職務に励む。
- 日清戦争始・1894 = 49歳：日清戦争の検疫事業を後藤に担当させることを陸軍次官兼軍務局長の児玉源太郎に提案、その成果により後藤は内務省衛生局長に復職し、また児玉に認められたことが、児玉台湾総督の下で後藤が台湾総督府民政長官に起用されるきっかけとなったのである。一方、森鷗外は陸軍軍医監に昇進して日清戦争に従軍、脚気伝染病説にこだわって陸軍惨害。日清戦争勃発に、医務局長として大本営野戦衛生長官となり、天皇に随行して広島大本営に移るとともに、陸軍病院での看護婦登用を実現。
- 日清戦争終・1895 = 50歳：天皇の命で、馬関(下関)で狙撃された清国大使李鴻章を治療回復させ、男爵になり、清国からも勲章。
- 白馬会・1896 = 51歳：台湾を巡視するが、台湾での脚気惨害を知る高島鞆之助が、第2次松方内閣の陸軍大臣に就任すると、軍医トップとしての戦争中の脚気惨害の責任が指摘され、
- 八幡製鉄始・1897 = 52歳：*事実上の引責辞任として、医務局長を辞任に至るが、長州閥のトップ山縣有朋や薩摩閥のトップ大山巖、また児玉源太郎などと懇意で、その後も陸軍軍医部(後年、陸軍衛生部に改称)に隠然たる影響力をもち、茶人としても知られ、況齋・况翁の号があり、
- 政党内閣初・1898 = 53歳：松浦詮が在京の華族・知名士らと設立した輪番茶事グループ(和敬会)の会員となり、東久世通禧・三井高弘・安田善次郎ら16人とともに{十六羅漢}と呼ばれる一方、大倉喜八郎から大金を託され、彼の望む、大倉商業学校設立を実現させて、理事兼督長をつとめ、
- 田中正造直訴 1901 = 56歳：中江兆民が喉頭癌で病臥しているとの記事に、20年前を思い起こし見舞いの手紙、自筆の細かい書き入れのある「一年有半」を贈られ感激、2,3度往診するも空しく死去し悲痛。予備役に編入される。林学博士の本多静六から依頼され、日比谷公園の安寧健康上の設計に参加、
- 教科書疑獄・1902 = 57歳：貴族院議員に勅選される。大橋佐平に託され私立図書館を設立。
- 日露戦争始・1904 = 59歳：日露戦争が勃発すると、国内赤十字救護班視察のため各予備病院を巡り、九州、四国、仙台を巡視。
- 日露戦争終・1905 = 60歳：大本営付臨時陸軍検疫本部兼務となり、失明軍人のため盲学校寄宿舎を設立するなど、社会貢献に尽力、
- 満鉄発足・1906 = 61歳：勲一等旭日大綬章。日本赤十字社名誉社員となる。
- 韓国反日暴動 1907 = 62歳：陸軍後備役に入る。失明軍人ら卒業帰郷する。
- アソキ創刊・1908 = 63歳：プロイセン王国より赤十字第三等記章。
- 韓国併合・1910 = 65歳：日本医学会名誉会頭。ナイチンゲール追悼祭に、看護婦表彰のため、石黒記念牌および基金を寄付。
- 明治天皇没・1912 = 67歳：明治天皇崩御に、親友乃木希典伯夫妻殉死をとげる。陸軍から退役するも、なお長寿で、
- ロシア革命・1917 = 72歳：第4代日本赤十字社社長。東京地方風水害の際には救護につとめ、翌年には、シベリアへ救護班を送る。
- 大暴落・1920 = 75歳：枢密院顧問官に親任され、日本赤十字社長を退任、子爵を賜わる。
- 原敬首相暗殺 1921 = 76歳：
- 関東大震災・1923 = 78歳：関東大震災には、自宅は火災を免れ一家無事。
- 治安維持法・1925 = 80歳：妻久賀子が死去し、自らは、リウマチスを発病。
- 日本時代始・1926 = 81歳：大正天皇崩す。
- 金融恐慌・1927 = 82歳：ドイツ国より赤十字第一等名誉章。
- 共産党事件・1928 = 83歳：治安維持法改正につき、枢府会議に病を押して出席、少数派として反対を唱えるが、狭心症劇発。
- 世界恐慌・1929 = 84歳：枢密院不戦条約についての会議に出席、論議のち発病し病臥、
- 芥川直木賞始 1935 = 90歳：陸軍軍医団による米寿祝賀会に出席できなかったため、諸氏が自宅へ来訪、長寿を祝賀される。
- 二二六事件・1936 = 91歳：旭日桐花大綬章。懐古談を坪谷水哉らが編さんした私家版「石黒忠恵 懐舊九十年」完成(のち岩波文庫「懐旧九十年」になるが、小松宮彰仁親王(日本赤十字社初代総裁)、乃木希典などに関する記事などが削除されている)。以後、老衰の度が次第に進み、自宅に引きこもり病氣静養に専念する、宿病は摂護腺肥大症。
- 日米開戦・1941 = 96歳：自宅病室で、老衰により静かに没した。遺言により、石黒家は襲爵手続を行わず、華族の栄典を喪失。

石黒忠恵「懐旧九十年(岩波文庫)」